

る所、首尾何れの部位に歸せるを知らず。軀幹構造のうち、混錯せる者の如し。故にその感能知覺、人類および高等動物の如く知覺靈敏ならず。尙ほ下等極まりたる動物に至りては、腦も手足も、取て尊卑の別き無く、同等の權利を有せる者の如し。彼の「外つ國に、もはら行はれり。」と、聞く共和政治、あるは、君民同治など、のしれらん革命國の政體の組織の如きは、何ぞ下等動物の身軀構造の不完全なるに異なるべき。甚だしきに至りては、手足が、腦の役目に代はり、腦が、手足に追ひ使はるゝが如き狀なせる國がらも、見ゆるをや。物議らぬも、程こそあれ。腹抱へて笑はんも、うたでぞ有る。故に外教の如きは、その教王とか言へらんが、はゞ利かして、無限の權力を國王の上に、恣にするぞかし。

皇統万世に一系なる我が大日本帝國にては、これらの國の手ぶり、これらの國の教へどもは、聞くも、思まはし。言ふも汚らはし。目ふたぎても、苦み。鼻つまみても、唾し。拳かためても、かなぐり。蹴たふしても、賤しむべし。嗚呼苟も、政務のすぢに執掌ひ、布教の任に當る人よ、努め國體を忘るなかれ。努め帝國を、汚すなかれ。

『曲肱偕談』を讀みて少年子弟に警告す(中)

東京 天山居士

熟々世上を觀するに、彼の老羸の人は勿論、少壯血氣の士と雖も、其の志を行ひ業を成さんとして一蹶再蹶すれば、忽ち悲觀的人と爲り、世を果敢なみて獨り白雲深林の裡に隱遁するもの、古今東西其例に乏しからず。中に就て、東洋諸國最も其風を追ふ。我が日本帝國の人士の如きも、之に倣ふもの少なからず。嗚呼、是れ果して何の由る所ぞ。

吾人は明かに斷言す、其遠因主因は儒教佛教に在り。其の近因は人々の志氣薄弱なるに在りと。

儒教佛教の教義が多く悲觀的厭世的なるは、世人の熟知する所、吾人今茲に解説の勞を執るの要を見ず。唯、儒教入りて已に二千年、佛教の來亦遠く千二百年の往時に在り。其の悲觀的厭世的の習風を一般人士の間に浸漸する、誠に久遠なりと言はざるべからず。夫れ唯久遠なり、是を以て、輒く之を革むべからず。乃ち輒く之を革むべからずと雖も、依然として其の習風を存するは、畢竟老羸の人を誤り、少壯血氣の士を賊する所以にあらざるか。將た凡夫凡婦が世路の苦惱を

遣るべき一條の血路として必らずしも其の習風を滅却すべきにあらずるか。

此點に於て、吐虹子は言へり。

人間の是と非とを斷つて一身社會を脱し、白雲深き處に科頭箕踞し、吟嘯を擅にして身世を其境に終るもの、賢と不肖とに關せず、余は寧ろ之を稱せざるなり。既に人にして社會の爲めに盡すの志なくんば、何の暇ありてか其人を顧みるを得む。賢と不肖とは天の授くる所、賢なるも誇るに足らざるなり、不肖なるも愧つるに足らざるなり。唯、誇るべくんば滿腔の丹心社會の爲めに殉するに在りて、若し愧つべくんば人間の義務を抛擲し去るにあるなり。而かも東洋の癖習は是等の人を指して隱君子と稱し、或はたゞ、或は欣慕す、是れ豈に謬れるの甚たしきものにあらずや

塵外子は辨して言へり。

未だ悉く探て以て律すべからずとするも、能く時弊を罵り、積習を破らんとする至言といふべし。只た夫れ、去るべくして去り、隠るべくして隠るゝもの、予深く咎めず。然りと雖も、去るべからずして去り、隠るべからずして隠れ、或は尙は一を轉せば、去

るべくして去らず、隠るべくして隠れざるもの、世其類尠なしとせず。是れ亦東洋の癖習なるか、將た舶來の新潮なる乎、未た之を知らずと雖も、白眼一たび天下を睨み、更に潛心仔細に社會の真相を覗へば、思ひ蓋し半ばに過ぎむ。

吐虹子は猶ほ西行法師が現世を果敢なみて身を佛門に寄せんとせし折に口ずさみたる三首の歌を擧げて「少年者流マタかの厭世的文字に觸るゝべからず」と疾呼し、塵外子は聲に應じて「由來、佛者の厭世的なる悲觀的なるは言ふ迄も無けれど、吾輩は絶対に攻撃するものにあらず。人生の行路甚だ艱難にして、時に其地位其境遇に由て大に厭世の想念を湧かし、悲觀の感情を漲らすもの、また凡夫の淺猿しくも已むを得ざる所ならむ乎。之れを是れ絶対に排斥非難するは、人生の辛酸を未だ完く味ひ盡さるものに非らずむば、猶ほ頑童痴兒に高尙なる科學或は繁劇なる家政を知らずと責むるにも似て、頗る無理なる注文と謂ふべきなり。……彼の厭世的悲觀的なるもの、吾輩は其情に於て酌む所あり、絶対に排斥する能はざるも、少くとも少壯有爲の同胞に對つては、熱心に之が反對の側に立ち、奉公愛國の實行を奨め且つ希はざるを得ず」と答ふ。

之を要するに、吐虹子は痛く厭世的悲觀的の言動を非とするものなり。塵外子は「世の少年者流が夙夜盤雪の苦を積み、學成り、業了へて而して後ち國家に竭すべきの時に當り、厭世の觀念徒らに熾んに齎らす所の英資空しく顯はれざるに至らば、其の結果想はざるべからず」として之を憂ふるも、大膽に於ては必らずしも厭世的悲觀的の言動を非とするものにあらず、寧ろ其情酌むべく、其行憐れむべしと爲すものなり。請ふ吾人の思ふ所を述べて之を評せん。兩子の寛容なる、必らず之を咎めざるべきなり。

詞 華

○取消 前號詞華欄内石丸忠胤君署名無題の長歌短歌は本社の見解と相容れず登載を見合すべき處誤つて輯録したるに付き取消す

惟一社

年の始のほぎこと

木村正辭

まことや、一夜ねて、明たるけふをことしどかぞへ初つゝ、そこにも恙なく、あら玉の年を迎給ひらんは、

いどうれし。さては去年の日清の戦争もをさまりて、兩國のむつびも舊の如くなり侍りしは、さるものにて、臺灣島をば、我が御國の有となし給へるよ、古へにもためし少き盛事にして、萬の國々かけて、日の本の名をかゝやかしたるこそ、いと心ゆくわざには侍れ、今し、年の始のこどほぎ聞えさするにつけて、このよろこびをも申侍るになむ、あなかしこ。明治の廿九年といふどしの一月一日

同

黒川眞頼

年あらたまりぬる御よろこび、きこえまゐらす。こなたにも事なくなむ、さてもこどほは、から國のいくさのさわぎに、年のはじめとても、あづ心なくこそ侍りしか、こどしはおだしき世の中となりにて、あたらしき月日をむかへ侍れば、こよなうのどけくなむ。いま來むにちえうびには、かならずまゐりはべらむと思ひ給ふれば、よろづはたいめたまはりてとて、もらし侍り、あなかしこ。一月一日